

S. R. Fussell & R. J. Kreuz, eds.,
Social and Cognitive Approaches to Interpersonal Communication (1998)
Chapter 2.

The Varieties of Intentions in Interpersonal Communication

Gibbs, R. W. Jr.

話者意味の表出と理解は、話し手の伝達意図の認知に依存し、それに制約されている、という考え方は、多くの研究において暗黙の前提となっている。本章では、伝達意図の重要性について検討する。

1.

意図の多様性

意図とは 伝統的に、意図は行為遂行の前にはたらく心的行為であると考えられている。話し手は、聞き手に明示したい想定集合の表象を心に抱いている、と考えられる。

意図の階層 どんな発話でも、いろいろな意図を反映している。それらの意図は階層をなしている (例: "Winter is the best season to go surfing in Santa Cruz"):

- 高レベルの意図... 他者にもたらそうと意図されている信念・感情・行動など。(サンタ・クルーズでのサーフィンに最適な季節についての話し手の信念を聞き手に受け入れさせようという意図)
- 中レベルの意図... 選択された知覚経験的諸特徴への意図。(英語で話された言明を認識するという知覚的経験を、聞き手になさしめようという意図)
- 低レベルの意図... 知覚的経験をつくりだそうという意図。(英語の音を発するという意図)

話し手の伝達意図の聞き手による決定は、高レベルの意図を推論する能力に依存している。

† web 公開版。報告: 小野 (東京都立大) ono-shigeru@c.metro-u.ac.jp

伝達意図 しかし、ある行為における高レベルの意図はなにかを決めるという問題は、こみいった問題である。表出意図と伝達意図とを分けて考える必要がある。

- 表出意図 ... 例, 職人が、自分のことを良い職人だと考えてもらうことを意図して、良い椅子をつくる場合。意図の認識は、その実現を含意しない。
- 伝達意図 ... 例, 正義について考えさせようと意図する場合。意図の認識は、その実現を含意する。

多くの対人的状況では、意図の認識がその実現を導く。Sperber&Wilson(1986) は次の例を挙げて説明している。

メアリーが、いま自分はのどが痛い、という事実をピーターに知らせようと意図している場合について考えてみよう。その意図を実現するひとつの方法は、のどが痛いということの直接的な証拠を与えること(かすれ声で話すこと)である。この場合、メアリーの意図は実現されるが、メアリーがこの意図を持っていることは認識されない¹。

次に、メアリーが、去年のクリスマスイブに自分はのどが痛かった、ということピーターに知らせようとしている場合について考えてみよう。この場合、のどが痛かったことの直接的な証拠を示すことはできないが、のどが痛かったと知らせたいと意図しているのだということの直接的証拠を示すこと(「去年のクリスマスイブはのどが痛かったの」と発話すること)はできる。ここで、メアリーは3つの意図²を持っている:

- (a) 彼女の発話によって、ピーターに、彼女がのどが痛かったと信じさせること³
- (b) ピーターに意図(a)を認識させること⁴
- (c) ピーターが意図(a)を認識することが、ピーターが信じる理由の少なくとも一部をなすこと⁵

¹ S&W は、こうした場合を伝達とはみなしません。

² この区別はS&Wのオリジナルではなく、Strawson(1964)に由来しています。

³ S&Wはこれを「情報意図」と呼びます。

⁴ S&Wはこれを「伝達意図」と呼びます。通常の場合では、伝達の結果として、情報意図と伝達意図の両方が実現されます。ただし、後者のみが生ずることもあります。

⁵ つまり、伝達意図の達成によって情報意図を達成しようという意図。これが伝達の必須特徴であるかどうかについては、議論があるようです。

2.

相互信念と意図認識

伝達の成功のためには、聞き手と話し手は相互知識を持たなければならない。

推論は、相互知識の役割によって、authorized な推論と unauthorized な推論とに分けることができる⁶。

Searle(1990) はこう論じている。協同行為(たとえば談話)は、個人の意図と相互信念には還元できない。その説明の為には、協同意図ないし we 意図の特徴づけが必要となる。それぞれの行為者は、協同目標の達成を we 意図しているのであり、その手段として、個人の意図を持つのである。

この見方の中では、伝達意図は単なる個人的な心的行為ではなく、参加者のあいだの相互信念の相互作用を通じて構築された社会的産物である。対人的伝達における協同についての現在の研究の大部分は、we 意図という観点から理解すべきものであろう。we 意図がいかに構築されるかは、今後の研究における重要なトピックである。

3.

非言語的伝達における意図の協調

伝達的な非言語的行動 身振りや発話は密接に協調している。それらはおなじ概念的ソースから生じている (McNeill,1992)。身振りは発話理解を促進する。

私は、聞き手は非言語的行動の解釈において自然な行動と伝達的行動とを区別している、と考えている。非言語的行動についての研究は多いが、この区別の程度についての研究は少ない。

芸術作品 芸術作品の理解に際しては、その制作者の意図の理解が含まれる。たとえば...(略)

⁶ 例示だけで定義がありませんが、話し手の意図についての正しい推論と(結果的に)間違った推論のことを指しているようです。

4. 伝達における意図についての懐疑的な見方

人文学・社会科学における懐疑的見解

- 書き言葉は話し言葉よりも「脱文脈化」されており，書き手と読み手のあいだの共通基盤がない。
- 話し手の伝達意図は重層的であり，その決定は困難である。

従って，書き手の意図は，文章の解釈を制約しない。文章の意味の決定は，「文章の意味」の詳細な検討によっておこなわれる (Wimsatt&Beardsley, 1954)，ないし，「過去と現在の文章の終わり無き網」における無限の潜在的意味を認識することによって脱構築されるのである (Derrida, 1973)。

人類学における懐疑的見解 Duranti(1988) はこう論じている: サモア人の発話解釈方略においては，発話とその意図の区別がおこなわれない。発話の意味は周囲の環境 (たとえば聞き手の反応) に依存しており，話し手が「私はそういう意味で云ったのではない」と反論することはない。このちがいは子どもと養育者の相互作用の性質にもあらわれている。

5. 懐疑的な見方への返答

以上の議論は，聞き手が話し手の意図を見つけようとしなないことを意味しているわけではない。

プロセスとプロダクト 発話解釈における心的プロセスと，そのプロダクトとを区別する必要がある。

- サモア人は，まず話し手の意図の復元を即時的・無意識的に試み，その後それに返答する際に，話し手の意図を越えて進むのかもしれない。
- 書き手の意図に制約されない文章の解釈は，批評家による解釈の，意識的なプロダクトである。それは，批評家が無意識的におこなっているプロセスを反映しているとは限らない。

認知科学が焦点をあてるのは、言語処理における最初の数秒のあいだに生じる、オンライン的な心的プロセスである。その性質は、プロダクトからはわからない。

実験的証拠

- Gibbs, Kushner, & Mills(1991): 被験者に比較の言明を呈示し、それが { 詩人/コンピュータ・プログラム } によってつくられたものだと教示した。詩人条件のほうが、有意味性評定が高く、理解にかかる時間が長く、無意味判断にかかる時間が長くなった。
- Shanahan(1992), Tierney et.al.(1987): 書き手の伝達意図について能動的に推論する読み手は、理解・記憶課題の成績が良かった。

6. 対人的伝達における意図を越えて

話し手の意図を誤解しているわけではないのに、話し手の意図を越えた意味を引き出してしまうことも数多くみられる。例、話し手が皮肉を意図しているのではないのに、皮肉だと感じて反応する場合。

皮肉の理解 Gibbs, O'Brien, & Doolittle(1995):

John and Bill were taking a statistics class together. Before the final exam, they decided to cooperate during the test. So they worked out a system so they could secretly share answers. After the exam John and Bill were really pleased with themselves. They thought they were pretty clever for beating the system. Later that night, a friend happened to ask them if they ever tried to cheat. John and Bill looked at each other and laughed, then John said, "I would never be involved in any cheating."

John and Bill were taking a statistics class together. They studied hard together, but John was clearly better prepared than Bill. During the exam, Bill panicked and started to copy answers from John. John didn't see Bill do this and so didn't know he was actually helping Bill. John took the school's honor code very seriously. Later than night, a friend happened to ask them if they ever tried to cheat. John and Bill looked at each other, then John said, "I would never be involved in any cheating."

上の例では John は皮肉として理解されることを意図しているが、下の例ではそうではない。実験の結果、皮肉性の評定は下の例のほうが高かった。このように、伝達的目標に関わらず、意図せずに皮肉をつくってしまうこともある⁷。

7.

結論

今後の問題 対人的伝達の心理学的説明における今後の問題は:

- 多層的な意図の表出・理解のありかたを説明すること。その鍵になるのは、we 意図の構築についての説明である。
- 伝達意図を越える解釈がおこなわれるのは、いつ、どのようにしてか。

伝達の諸側面 意図の役割は、伝達のどの側面に注目するかによって異なる。意味理解のさまざまな時点について、それぞれ異なる方法論によって分析しなければならない。

おわり

⁷ この議論は、伝達意図に基づく言語的皮肉と、そうでない状況的皮肉とをごっちゃにしているように思うのですが...